

阿波の名医

医学博士
板東 浩



目次

弘住田赤梶寺藤古中若神藤三美井小高三関賀井天目は
田友中枝澤本川田林河本浦馬上原宅川出羽じ
克治俊守完潤鑽太朗市次篤虎庚文浩順肇春良寛玄三大め
忠実太一次二郎吾藏策一三堂造斎速斎悦洋造次に

48 46 44 42 40 38 36 34 32 30 28 26 24 22 20 18 16 14 12 10 7 4

今賀三 大久保 福島 小手島 齋藤 東也 緒方順一 手嶋 薩摩山内利勝 雄也 繕山 隋作 青山林仙逸作 寺澤定也 鎌倉半作 隋定也 田代山内也 古川九郎也 住谷脩也 田代平也 友岡一郎也 清次郎也 次郎也

A horizontal dotted line chart representing a single data series. The x-axis is labeled with years from 94 to 50, decreasing from left to right. Each year is marked by a vertical dotted line. The values are: 94, 91, 88, 85, 82, 79, 76, 73, 71, 69, 66, 64, 62, 60, 58, 56, 54, 52, 50.

Year	Value
94	94
91	91
88	88
85	85
82	82
79	79
76	76
73	73
71	71
69	69
66	66
64	64
62	62
60	60
58	58
56	56
54	54
52	52
50	50

「ごあいさつ」

徳島大学医学部同窓会青藍会・広報

板 東 浩

私が徳島大学を卒業した一九八〇年代、小野良一先生が青藍会会长を担当（一九八一～一九八七）されておられ（大神子病院院長／理事長）、公私ともに大変お世話になりました。その後、青藍会で広報を担当させて頂いております。その中で、大学の歴史に関わる委員会にも配属され、いろいろな史実を調べました。その流れから「阿波の名医」その魅力を紹介させて頂く機会を得ました。その中で思い出深いものがあります。当時は今のように簡単に情報が得られず、書籍を注文して数週間待つたり、写真一枚を撮影するため県立図書館へ通つたり、しばしば取材に出かけました。

このたび、今までご紹介した阿波の名医について、まとめさせて頂くことになりました。その人数は、江戸時代末期から最近に至るまで三九人に至ります。本企画について、長い期間にわたりご理解

「阿波の名医」の発刊に寄せて

— 常に書く人、板東浩さんのこと —

徳島大学医学部同窓会青藍会・会長

（二〇一〇）

荒瀬誠治

徳島大学医学部は四国で最も長い歴史を有する医学部です。昭和一八年の徳島県立徳島医学専門学校設立に始まり、二〇年に徳島医学専門学校と改称、その後徳島医科大学（二三年）、徳島大学医学部（一四年）を経て今に至ります。戦中戦後の社会・教育制度の激変にともない、所属・名称を変えながら医師を輩出してきました。これらの道を通った先輩諸氏の不断の努力の結果、現在の医学部があり私達がいます。

上記の全卒業生を纏める同窓会が「青藍会」で様々な活動を行っています。その一つが年二回の「青藍会会報」発刊ですが、ある時よりその会報の中に「阿波の名医」シリーズが始まり、筆者は板東浩となつていました。その頃の先生は青藍会活動、世界相手の学会活動、教育活動、音楽活動、執筆活動、他で超多忙な日々を送つておられました。そのような中での「阿波の名医」シリーズでしたが、取り上げた名医の選択、

この小さな冊子ですが、記述した中には先人の大きな意志が含まれております。今後、これらの情報が何かお役に立つ機会があり、徳島の名医が果たした業績や功績が広く周知されることがあれば幸甚に存じます。

二〇二二年（令和四年）一月

板 東 浩 拝



開設当時の徳島大学医学部

「阿波の名医」の発刊に寄せて

徳島大学医学部同窓会青藍会・前会長

（二〇一六～二〇二〇）

桜井えつ

圧倒的な取材努力に基づく名医の魅力発見（なぜ名医なのか）と、魅力を過不足なく伝える筆力は見事で、板東先生ご自身の「書いておきたい思い」が詰まつたものでした。阿波の徳島で医療を天職とし生き抜いた名医三九人の背景、医療・社会活動、後世への伝達までも眼中に入れたクロニクルを読むと、先人の全てが胸に飛び込み、時に驚きで満たされました。年二回の会報が届くたびにこの思いを味わつていきましたが、今回、全てがまとめられ冊子化されます。シリーズの筆者から本の著者への変貌は「常に書く人」のみならず、読者にとつても喜びです。名医個人の動勢、やりたかった事柄、できなかつた悔しい思い、ゆれる心情、等を知ることは、江戸末期からつい最近まつながります。完本「阿波の名医」は、上梓者の名とともに読者の胸中に刻まれることになるでしょう。

このたび、板東先生が発刊される「阿波の名医」について、ひとつご挨拶申し上げます。私は徳島大学医学部医学科の同窓会であります青藍会の前会長として四年間を担当させて頂いたのですが、板東先生には広報はじめ多方面にわたりご協力いただきました。「阿波の名医」シリーズも青藍会の会報に連載いただいていたのですが、会報のスリム化などの事情で中断を余儀なくされた経緯があります。この度まとめられ上梓されますとのこと、安堵し心からお喜び申し上げます。



徳島医科大学開学祝典式当時
昭和23年2月10日（蔵本町旧兵舎跡）



中田学長碑

解ご協力を賜りました青藍会会长や広報委員会など関係者の先生方に対して、御礼を申し上げたいと存じます。